

## 関門域の方言動態

— 『下関市 北九州市 言語地図』に見る —

岡 野 信 子

### 要 旨

この稿では、関門海峡をはさむ二市である下関市と北九州市とを合わせて関門域と呼ぶ。関門海峡は本土と九州を隔てる海峡であるが、古くから人の往来は頻繁であった。ことに海底トンネルと関門橋によって結ばれてからは、それはいちだんと促進されて、海峡を渡って通勤・通学する人も多い。そのような言語環境は方言状況の上にも影響を及ぼしているはずである。

今、下関市 北九州市 『言語地図』上の老年層の方言状況から青年層の方言状況への動きを方言動態と把握して、その動きを見る時、もっとも著しい動きは、海峡をはさむ両域方言の同質化である。その同質化は共通語化であることが多いが、北九州方言への傾斜の状況も見える。またその一方には、両域方言の同質性、また方言差がそれぞれ温存されている状況もあり、新方言の受容あるいは創出の状況も見えていて、その動きは単純ではない。

### は じ め に

関門域の方言動態を『下関市 北九州市 言語地図』の老年層図と青年層図の比較によって見ていきたい。これの調査項目は100項目で、調査地点は下関市が30地点、北九州市が39地点である。調査対象者は老年層が70歳前後の女性、青年層が高校2年生の女子、おのおの1名である。その地点に生まれ育ったその1名の話者を、その年層を代表する話者と考えている。

この老年層図と青年層図とを比較する時、以下のような言語推移状況が認められる。以下の記述においては、老年層図を〈老〉、青年層図を〈青〉と略記し、下関市域を①、北九州市域を②と略記している。

#### 一. 共通語化

##### 1. 海峡をはさんでの方言差が消えて同質化、共通語化した状況

「10. 飽きる」の〈老〉では、①の主分布事象は下一段活用の「アケル」、②の分布事象は五段活用の「アク」で、「アク」は①の響灘がわにも分布している。これが〈青〉では両域の主分布事象は上一段活用の「アキル」に移っていて、共通語化の状況が見られる。

もっとも㊸には〈青〉にも「アク」が「アキル」との併存あるいは単存で11地点に残っている。ただし「11. 飽きない」の場合、〈青〉では「アカン」は㊸の2地に残るばかりで、そのほかは㊹・㊺両域が「アキン」で被われている。

このように両域の方言差が消えて共通語化する傾向の見える図は以下のように多い。なお、以下にあげた方言事象は、得られたものの中のおもなものである。

調査項目	〈老〉 下関市	〈老〉 北九州市	〈青〉 両域
10 飽きる	アケル・アク	アク	アキル
11 飽きない	アケン・アカン・アキン	アカン・アキン	アキン
19 私の物	ウチノソ・ウチノホ	ウチノン・ウチント	ウチノ・ワタシノ
20 500円分	ガソ・ホド	ガト・ガン(豊前)	ブン(㊸にガト残存)
57 前庭	ホカ	カド	ニワ
59 つらら	スマル	モーガンコ	ツララ
63 親友	チンゲー・ホーバイ	ドシ・ヘコカエ	シンユウ
64 働き者	シンボーシ・シンボーシャ	キバリテ・シンボーニン	ハタラクモノ
71 ふくらはぎ	ランキョー・フクロハギ ワタモチ(六連島・蓋井島)	スボ(豊前)・ツト(筑前) ワタモチ(筑前)	フクラハギ
74 片足跳び	リンリン・ケンケン	イッケンケン	ケンケン
75 (使って)なくなった	ミテタ	ノーナツタ	ナクナツタ
84 叱る	クジオクル・オゴル	オゴル	オコル
87 雨戸をしめる	タテル	セク	シメル
97 濡れて気持ちが悪い	ヨーソケナイ	シロシー	キモチガワルイ
98 そんなこと	ソネーナ	ソガーナ(豊)・ソゲーナ(筑)	ソナナ

## 2. 優勢であった北九州方言事象が消えて全域が共通語化した状況

ここに「北九州方言事象」と言うのは、この言語地図の㊸に主として分布している事象を意味している。九州全域を見渡した時にはその分布域は広がる。

「32. (雨が)降っているようだ」では、〈老〉には㊸に「～ゴトアル」が分布している。㊹には「～ヨーナ」が優勢で「～ゴトアル」もいくらか見えている。〈青〉では両域で「～ミタイ」がこれらに替わっている。

また「30. 行きたい」「31. 行きたくない」に相当する「イコーゴトアル」「イコーゴトナイ」も〈老〉では㊸を主分布域として㊹にもいくらか分布しているが、〈青〉では「イキタイ」「イキタクナイ」に替わっている。

「22. 本ばかり」の〈老〉には㊸に「本のジョー」が見えているが〈青〉にはまったく見えず、「バカリ」と「バッカシ」が全域に分布している。

3. 優勢であった下関方言事象が消えて全域が共通語化した状況

下関方言事象と言うのも、本言語地図の⑦に分布していることを意味している。これらは老年層では長門域に、あるいはさらに広く山口県全域に分布しているものが多い。

「46. 言われた」の〈老〉には、⑦に、「ユーテジャッタ」「ユーテヤッタ」がそれぞれ2、3の地点に、「ユーチャッタ」がほぼ全地点に見えている。これらは軽い尊敬語であるが、〈青〉には1、2の地点に「ユーテヤッタ」「ユーチャッタ」が残るばかりで、「イワレタ」「オッシャッタ」が⑦・⑧の全域に分布している。

また、⑦の〈老〉では「55. 見送り辞」の「ゴネン オイレハンサー」（御念をお入れなさいませーお大事になさいませ）、「ネン オイレ ナー」が全域に分布しているが、〈青〉では⑦・⑧の全域が「(オ)キオツケテ」と「サヨーナラ」である。古雅なあいさつは若い人びとの好みに合わないであろう。

これらのほかにも、ここに該当するものは以下のように多い。

調査項目	〈老〉 下関市	〈青〉 両域
36 言われた	ユーテジャッタ・ユーテヤッタ・ ユーチャッタ	イワレタ・オッシャッタ
55 見送り辞	ゴネン オイレハンサー・ネン オイレ ナー	(オ)キオツケテ・サ ヨーナラ
56 感謝辞	タエガタイ ナー	アリガトー
58 井戸	イケ(池)	イド
62 あの人	アノアンター・アナンター	アノヒト・アレ
67 お転婆	ピンピラ・オッピン	オテンバ
68 いい子いい子	ホンソホンソ(奔走奔走)	ヨシヨシ
69 つば(唾)	ツズ	ツバ
70 舌	ツバ	ベロ・シタ
77 数詞(卵・小石)	イッキ・ニキ	イッコ・ニコ(イッキ・ ニキは⑦5地に残る)
78 おおみそか	トシノヨ	オーミンソカ
86 手伝う	テゴースル	テツダウ
96 うるさい	シロシー	ウルサイ

4. その他、共通語化の指摘されるもの

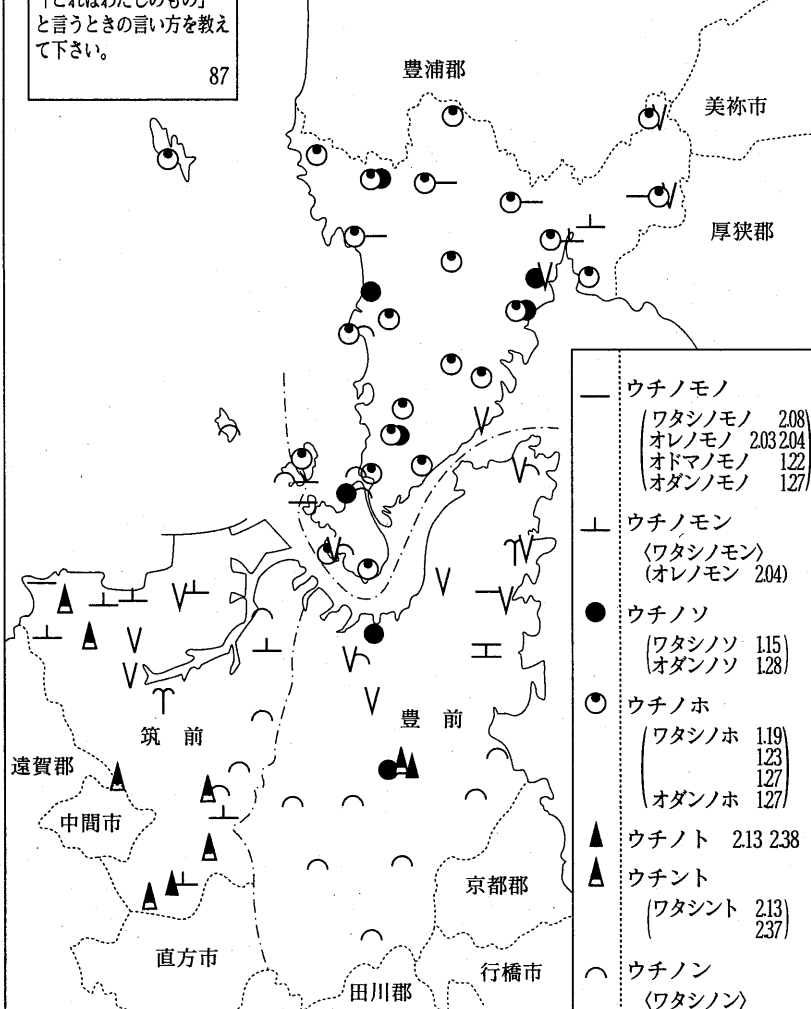
「72. お手玉」には〈老〉では⑦に「オヒトツ」「オサラ」「ミツゴ」などが優勢で「アヤオリ」も一地に見えており、⑧には「オジャミ」「イシナゴ」が多地点にあったが、〈青〉では全域が「オテダマ」である。また「73. 肩車」では、〈青〉にも⑧に「ビピンコ」がいくらか残っているが、「カタグルマ」がほぼ全地点に分布している。「75. じゃんけんの

19 私の物 (老)

「これはわたしのもの」  
 と言うときの言い方を教えて下さい。

87

下関市 言語地図  
 北九州市



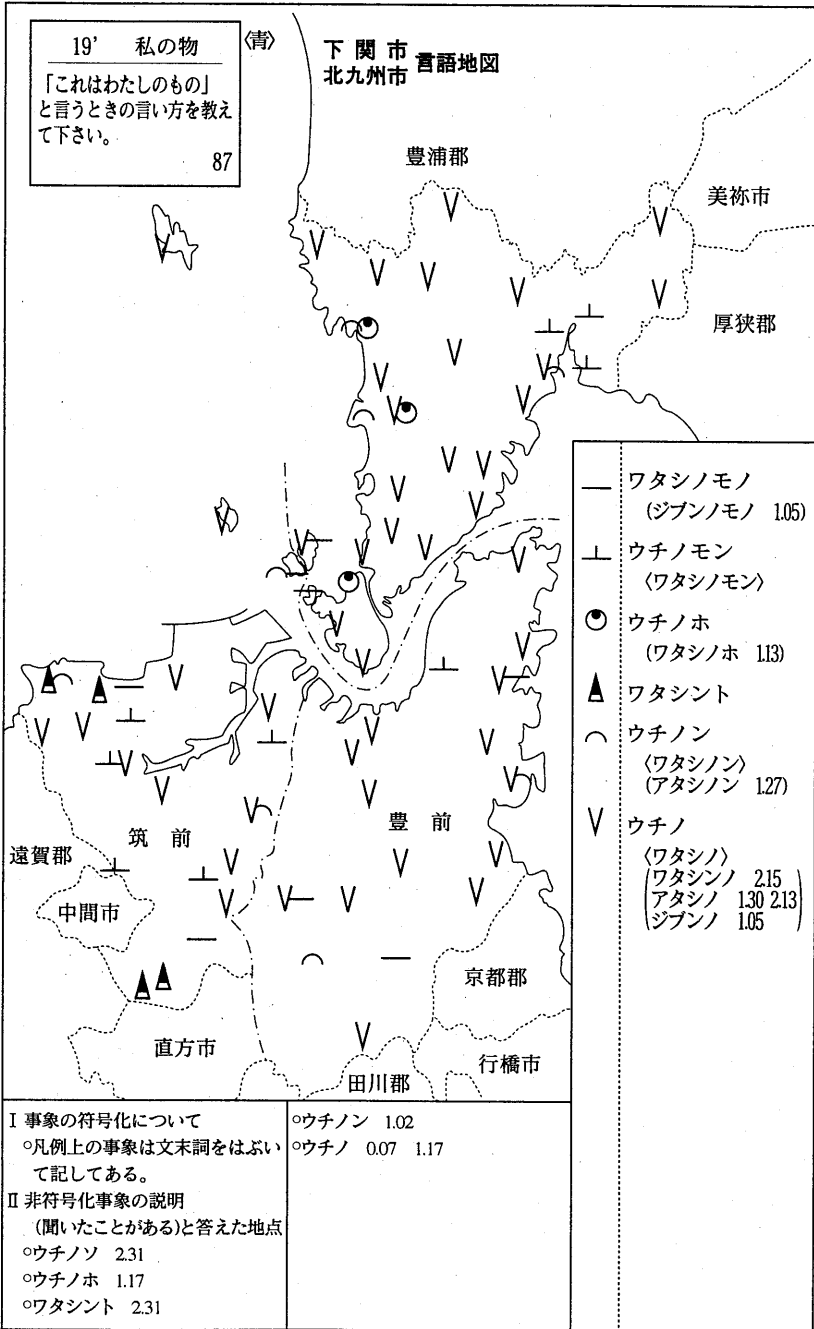
- ウチノモノ  
 (ワタシノモノ 208)  
 (オレノモノ 203 204)  
 (オドマノモノ 122)  
 (オダンノモノ 127)
- ⊥ ウチノモン  
 (ワタシノモン)  
 (オレノモン 204)
- ウチノソ  
 (ワタシノソ 115)  
 (オダンノソ 128)
- ウチノホ  
 (ワタシノホ 119)  
 (123)  
 (127)  
 (オダンノホ 127)
- ▲ ウチノト 213 238
- ▲ ウチント  
 (ワタシント 213)  
 (237)
- ∩ ウチノン  
 (ワタシノン)
- ⌣ ウチガン 232  
 (オレガン 202)
- V ウチノ  
 (ウチンも 210)  
 (ワタシノ)  
 (ワチノ 122)  
 (オレノ 202)

I 事象の符号化について  
 ○凡例上の事象は文末詞をはぶいて記してある。

II 符号化事象の説明  
 (昔のことば)と答えた地点

- オレノモノ 203
- オドマノモノ 1.22
- ウチノソ 2.13

- オダンノホ 1.27
- ウチノン 1.02
- ワチノ 1.22



掛け声」は〈老〉〈青〉ともに多事象であるが、旧来の遊戯語彙はいったいに単純化、共通語化する。

また〈老〉で多事象の答えられた「65. 怠け者」「80. 正座する」も、〈青〉ではほとんどの地点で項目名どおりの共通語が答えられている。

「44. 貸してください」では、〈老〉の両域に分布していた「オクレ」系の語も、㊦の彦島の一地と㊧の筑前域に分布していた「ツカーサイ」も、〈青〉では消えて、全域が「クダサイ」となっている。敬語の単純化、共通語化も青年の言語の一特色である。

「1. 先生」「2. 税金」「3. 座ぶとん」「4. 雑巾」「5. 大根」「6. 速い」「7. 白い」「8. 悪い」「9. 眠い(眠たい)」では、シェ・ジェ音、ザ・ゼ・ヅに対応するダ・デ・下音、[ai]・[oi]・[ui] 連母音の同化の状況を見たが、共通語音化はすでに〈老〉に見られた。ただし「悪い」を「ワリー」と発音すること、つまり [ui] 連母音の同化は〈老〉にも〈青〉にも見られる。

## 二 北九州方言への傾斜

〈老〉では海峡をはさんで方言差を見せているが、㊧を主分布域としていた事象が〈青〉では㊦にその分布域を広げて全域を被っている図が以下のように見受けられる。

調査項目	〈老〉 下関市	〈老〉 北九州市	〈青〉 両域
17 元気だ	ゲンキジャ・ゲンキナ	ゲンキヤ・ゲンキニアル	ゲンキヤ
18 元気だった	ゲンキジャッタ・ゲンキナカッタ・ゲンキヤッタ (少ない)	ゲンキヤッタ	ゲンキヤッタ
28 あるまい	アルマー・ナカルマー・ナカロー	アルマイ・ナカロー	ナイヤロー
34 自分で着ることができ	キエル・キヤエル・キキル (少ない)	キキル	キキル・キレル
35 自分で着ることができない	キエン・キヤエン・キキラン (少ない)	キキラン	キキラン・キレン
41 してはいけない	シチャーイケン	シタライケン (多) シチャーイケン (少)	㊦シチャーイケン シタライケン ㊧シタライケン
95 疲れて苦しい	エライ・エラー	キツイ・ヒドイ (豊前)	㊦エライ・エラー キツイ ㊧キツイ

ここに見えているように、「17. 元気だ」「18. 元気だった」では、〈老〉の㊧に見えている「\*ゲンキヤ」「ゲンキヤッタ」が、〈青〉では全域分布となっている。また「28. あ

るまい」では、「～マイ」は〈青〉には見えず、「ナイヤロー」が全域分布である。このように、〈老〉の㊸分布事象の「～ヤ」「～ヤッタ」「～ヤロー」は〈青〉では全域に広がっている。

※ 終止形の「～ヤ」は、「～ヤ ネー」「～ヤケ」のように、文末詞や接続助詞を添えて用いる。

「34. 自分で着ることができる」(能力可能)「35. 自分で着ることができない」(能力不可能)の場合、〈老〉の㊸に分布していた「キエル」(着得る)「キヤエル」(着は得る)、「キエン」「キヤエン」は〈青〉にはまったく見えない。これに替わって、㊸を主分布域とする「キキル」「キキラン」が㊸での分布量を増し、分布域を広げている。なお、〈青〉にはこれとともに「キレル」「キレン」も全域にかなり優勢で、能力可能と状況可能を区別しないつまり共通語化の傾向も見えている。

「41. してはいけない」の「～ては」に相当する「～タラ」は、〈青〉では㊸にもかなり見られる。㊸の〈老〉〈青〉に「～タラ」が優勢であることから、これも北九州方言への傾斜を見せていると判断した。

語詞の図では「95. 疲れて苦しい」の〈青〉に、㊸に優勢な「キツイ」が㊸にもかなり広がっている状況が見えている。

### 三. 方言の温存

#### 1. 海峡をはさむ両域方言の同質性が温存されている状況

「38. 本を読んでいる」(進行態)の〈老〉では「ヨミヨル」が全域分布で、これと併存して㊸には「ヨンジョル」、㊸には「ヨンドル」「ヨンジョル」も分布している。㊸の「ヨンドル」「ヨンジョル」は㊸の「ヨンジョル」よりは劣勢である。このような状況は〈青〉においても変わらない。また「39. 運動会が行なわれている」ことを言う「アリヨル」が〈老〉〈青〉の全域に見られる。

<sup>2)</sup>『表現法の全国的調査研究—準備調査の結果による分布の概観』の「30. 花が散っている」(進行態)を見ると、「チリヨル」が近畿以西に広く分布している。また<sup>3)</sup>『方言文法資料図集(1)』の「54. 運動会がアリヨルと言うか」の図上に、「アリヨル」は中国・四国・九州に分布している。分布域がこのように広い方言事象は全国共通語表現に移りにくいかもしれない。

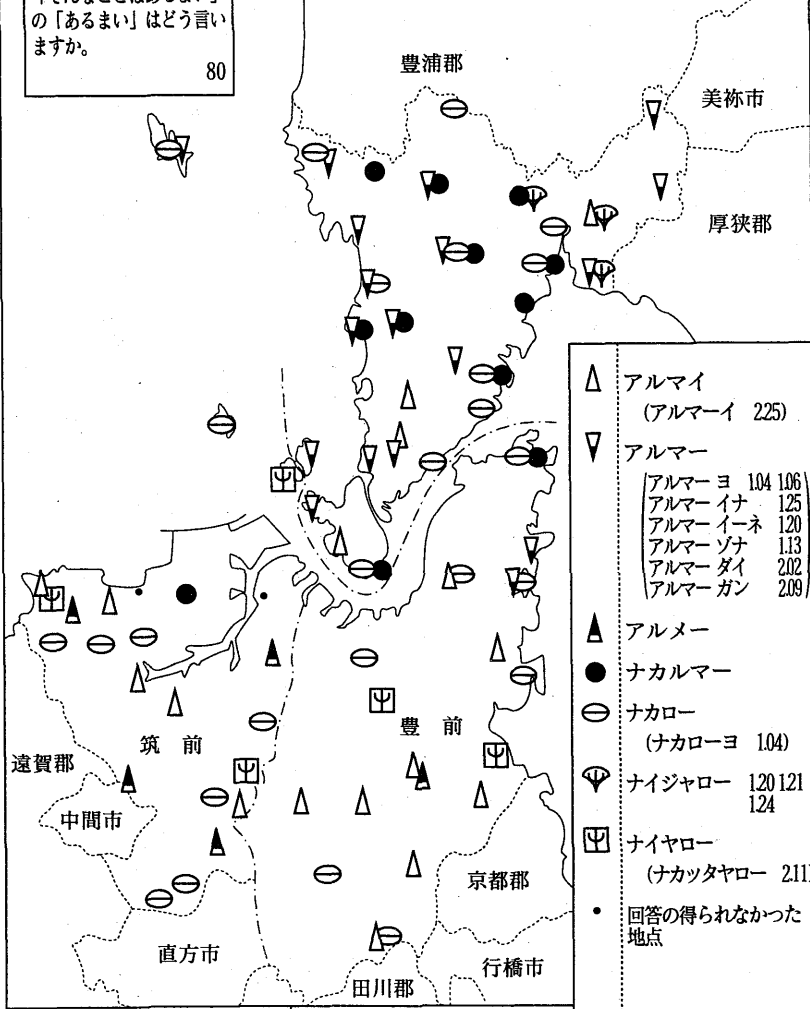
「14. 行け」には「イキ」が主として㊸に、「イキー」が㊸に分布している。長呼・短呼の差はあるが、ともに連用形命令表現である点に注目してここに採り上げた。対象者が女性であるためにこれが得られている。

「25. 雨が降っているから」の「から」に相当する助詞は〈老〉〈青〉ともに「ケー」と「ケ」である。「ケー」が㊸にやや多く、「ケ」が㊸にやや多い。

「21. 人に笑われる」の「に」に相当する助詞は〈老〉では「カラ」が全域分布である。

28 あるまい (老)  
 「そんなことはあるまい」  
 の「あるまい」はどう言  
 いますか。 80

下関市 北九州市 言語地図

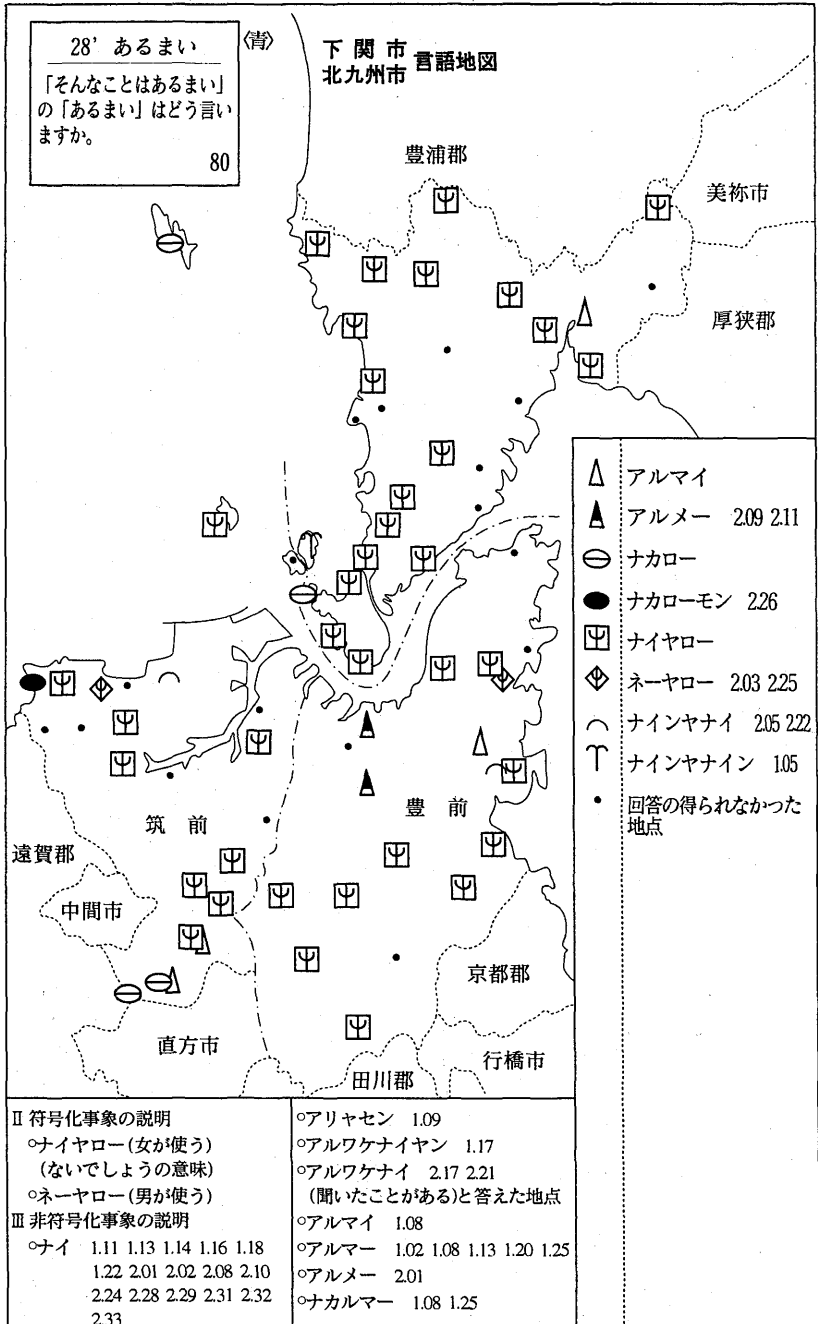


- △ アルマイ (アルマイ 225)
- ▽ アルマー
  - アルマーヨ 104 106
  - アルマーイナ 125
  - アルマーイーネ 120
  - アルマーゾナ 1.13
  - アルマーダイ 202
  - アルマーガン 209
- ▲ アルメー
- ナカルマー
- ナカロー (ナカローヨ 1.04)
- ◊ ナイジャロー 120 121 124
- ⊕ ナイヤロー (ナカツタヤロー 2.11)
- 回答の得られなかった地点

II 符号化事象の説明  
 ○アルマー(目上の人が多く使う) 2.03  
 ○アルメー(ときどき使う) 2.13  
 ○ナカルマー(あやふやな時) 1.24  
 (ときどき使う) 2.01  
 ○ナカロー(はっきりしない時) 2.35  
 III 非符号化事象の説明  
 ○ナカルマー(聞いたことがある) 1.07  
 1.08

○ネーヨ 2.24  
 ○アルモンカ 2.21





〈青〉では「ニ」も答えられているが「カラ」が優勢である。<sup>4)</sup>『方言文法全国地図1』の「27. 犬に(追いかけられる)」では、「カラ」は九州の西南域と山口県長門域の響灘がわにある(離れて山形県に「ガラ」が見えている)。

「51. 否定の問いかけに否定の答をする時の応答詞」(電話がかかって来なかったかと聞かれて、かかってこないと答える時の応答詞)は、〈老〉〈青〉ともに多く「イーヤ」(否定辞)である。これも九州的と言えようか。

「88. 庭をはく」の「ハワク」も九州方言であるが、これが㊸の全地点にあり、㊹にも分布を広げていて、〈青〉では㊹の分布地点が増している。

## 2 海峡をはさむ両域の方言差が温存されている状況

「12. 出ない」には、㊹は下一段活用の「デン」、㊸はラ行五段活用の「デラン」の方言差が〈老〉にも〈青〉にも見える。もっとも「デラン」は㊹にもいくらか分布を広げている。一方、「13. 出よう」では、㊹は〈老〉は「ジョー」、〈青〉は「デヨー」、㊸は〈老〉〈青〉が「デロー」で、下一段活用とラ行五段活用の方言差はここにも見えている。ただし〈青〉では㊸にも「デヨー」も見られて共通語化の状況も見えている。

「47. わかっているよ」では「イネ」を言う㊹方言と、これを言わない㊸方言との方言差が〈老〉にも〈青〉にも見られる。また「48. むずかしいのよ」では、「ソヨ」「ソ」「ホ」が㊹の〈老〉〈青〉にあって、これを言わない㊸との差を見せている。もっとも㊸にも「ソヨ」が〈老〉の3地に、「ソ」が〈青〉の1地にあって、わずかな伝播を見せている。

「50. 2時を基準とした1時55分の言い方」では、〈老〉・〈青〉ともに㊹が「2時5分マエ」、㊸が「2時マエ5分」である。「～時マエ～分」の言い方は、体言止め表現の多く見られる九州方言の特色をしるばせる。

語詞面では「82. 寄りかかる」を、〈老〉〈青〉ともに㊹は「スガル」、㊸は「ナンカカル」と言い分けているのが目立っている。また「61. 分家」は、〈老〉では㊹に「ヘヤ」「ニーヤ」「シンヤ」「シntax」などがあり、㊸は「インキョ」を主分布事象としている。〈青〉では「知らない」と答えた地点も多いが、〈老〉のこの状況をかなり残してもいる。これら以外にも㊸の〈青〉には「85. 仲間に入れる」の「カテル」「カッテル」、「86. 手伝う」の「カセースル」(加勢する)、「94. 歯が痛い」の「ウズク」がかなり残っていて、共通語化の顕著な㊹の〈青〉との方言差を見せている。

## 四 新方言の受容

「27. 知らなかった」を言う「～ンカッタ」は、〈老〉には㊹の1地と㊸の2地に見えているにすぎないが、〈青〉には両域のほぼ全地点に、単存で、または「～ンヤッタ」との併存で分布している。<sup>5)</sup>『瀬戸内海言語図巻上巻』の、「64. 聞かなかった」の〈老〉には、「～ンカッタ」が大府沿岸と愛媛広島両県島嶼にあり、〈少〉では大府から九州

まで、沿岸・島嶼一帯に分布している。関門域の〈青〉に優勢な「～ンカット」は瀬戸内海域を伝わってきたものであろう。

『49. 言ったじゃないか』では「ヤン」が〈老〉には㊸の3地に見えていて、〈青〉では両域の全地点に分布している。「ヤン」は近畿新方言の伝播したものであろう。

『92. 酸い』では〈老〉の全域に見えていた「スイー」は〈青〉では数地点に残るにすぎず、「スッパイ」がこれに替っている。また「塩辛い」では、「スッパイ」ほどに優勢ではないが、「ショッパイ」が両域の〈青〉にかなり見えている。<sup>6)</sup>『日本語地図1』の「41. 酸っぱい」「39. 塩辛い」を見ると、「スッパイ」「ショッパイ」は東日本に分布している。関門域の「スッパイ」「ショッパイ」は、新語、共通語として受容されたものであろう。

## 五 新方言の創出・発生

「15. 起きろ」「16. 食べろ」を、「オキリ」、「オキリー」「タベリ」、「タベリー」と言う「リ・リー語尾命令形」は、〈老〉では㊸にやや分布地点が多く㊹には少ない。〈青〉では両域の全地点に分布している。この命令形については<sup>7)</sup>「リ・リー語尾命令形の考察」で述べているが、全国諸地に点々と分布する状況から、関門域の「リ・リー語尾命令形」は関門域で創出されたものと考えられる。

また「36. 洋服は小さくなったがまだ着ることができる」(状況可能)「37. もう着ることができない」(状況不可能)では、「キレル」「キレン」が両域の〈老〉にもかなり見られ、〈青〉ではほぼ全地点にある。㊸の〈老〉には二段活用の「キルル」もある。この「ら抜きことば」も流行語をまねたものではなく、この地域でしぜんに使われてきた。創出ではなく発生と見るべきであろう。

「23. 勉強なんか大きらい」の「～なんか」相当の方言としては〈青〉では「～トカ」が全域分布で、㊸でことに優勢である。〈老〉にも㊸にかなり多く、㊹にもいくらか見えている。北九州人の私も周囲の人々も、この「トカ弁」をずっと以前から無自覚に使ってきた。関門域の「トカ弁」は㊸で言い始められたものであろう。

「29. するまい」には、「センドコー」(せずにおこう)が〈老〉には㊹の彦島の1地と㊸の2地に見えており、〈青〉では㊸の7地にある。これも㊸に創出された新方言であろう。

「100. 非常に」相当の「ブチ」は㊹の〈青〉では全地点にあり、〈老〉では5地にある。これは若い人々の創出した新方言を高年者がまねたのであろう。㊸には広がっていない。「ブチ」は「打ち言う」などの強調の接頭辞「ウチ」が副詞に転用されたものであろうか。㊹の〈青〉には「ブリ」「バリ」もそれぞれ2地に見られ、「バリ」は㊸の2地にもある。

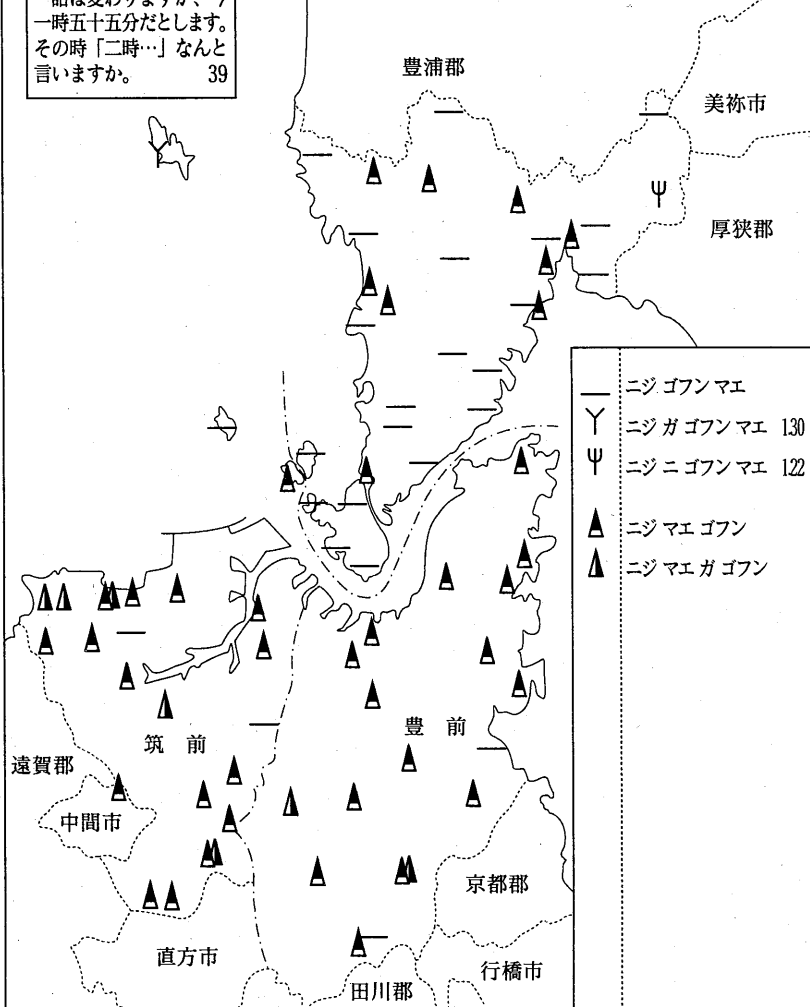
## おわりに

常識的な結論であるが、共通語化が一つの大きな動きであることは、この言語地図の〈老〉

50 ○時五分前と○時前五分

話は変わりますが、今一時五十分だとします。その時「二時…」なんて言いますか。 39

下関市 北九州市 言語地図

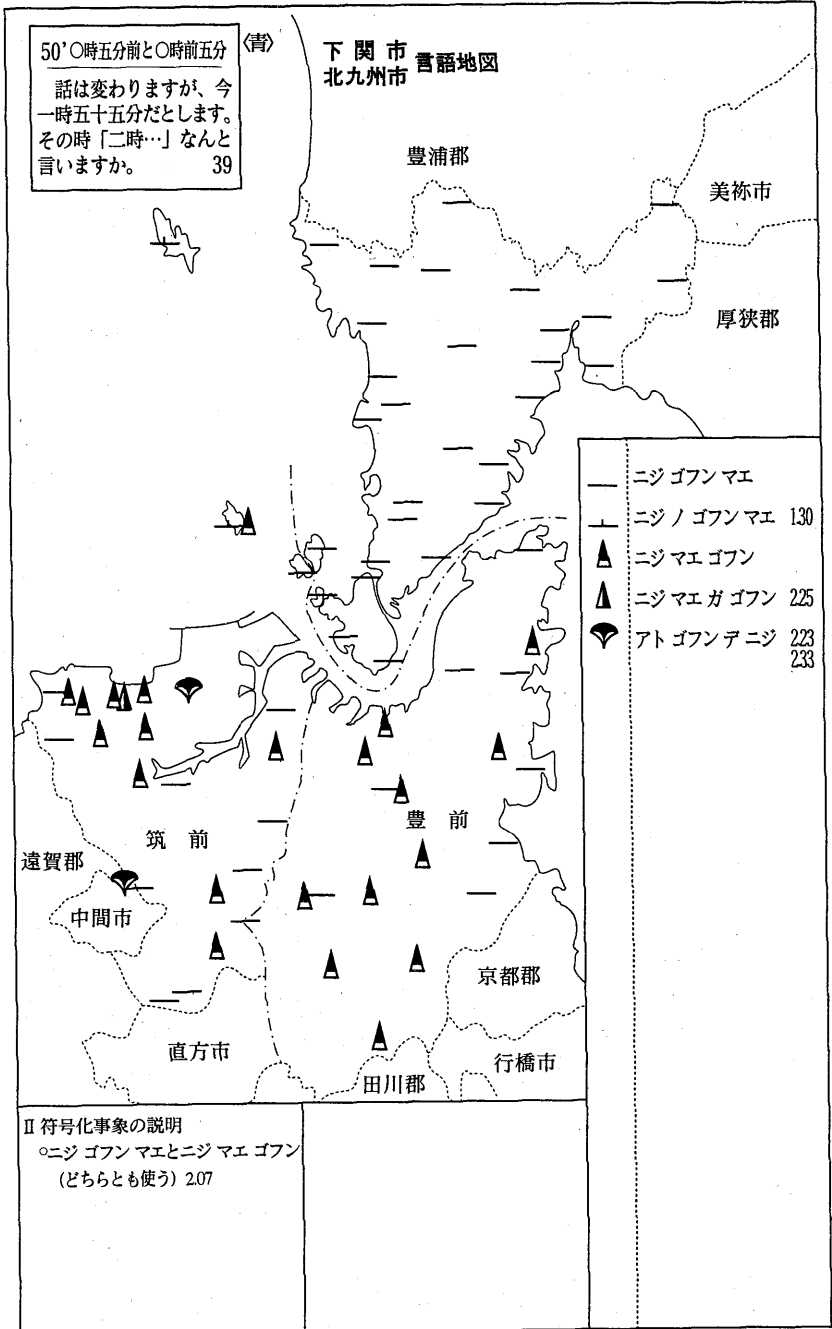


- ニジゴファンマエ
- Y ニジゴファンマエ 130
- Ψ ニジニゴファンマエ 122
- ▲ ニジマエゴファン
- △ ニジマエガゴファン

II 符号化事象の説明

- ニジマエゴファン (親しい人に使う)
- ニジマエガゴファン (ゆつくり教えるとき)

} 2.25



と〈青〉の比較によっても明らかであった。共通語化の結果、海峡をはさんでの方言差が〈青〉では消えた図が多い。

とはいえ、かならずしも共通語化だけではないことも、また見てきたとおりである。共通語化の勢力には及ばないが、北九州方言への傾斜を見せる図もあった。一方、〈青〉にも両域の方言差を見せている図もあって、関門域の方言動態の状況は単純ではない。

〈青〉における新方言の受容、創出と見られる図が比較的が少ないのは、選んだ項目にもよるのであろうが、日常の使用語を見る時にはこの程度のものかもしれない。

ところで本稿では〈老〉から〈青〉への移りゆきを方言動態と見たのであるが、〈老〉〈青〉それぞれの上にも方言動態は見えている。たとえば〈老〉だけを見た場合、語詞の44図の中には両域方言の方言差の画然としたものが多い。一方、語法・表現法の47図の中には、㊸の分布事象が海峡を渡って㊹にも広がっているものが多い。

㊹の方言事象が㊸に広がっているものもあるが、その分布域が豊前海岸域に限られている、あるいは分布地点が少ないといった状況が見える。そして共通語化の早いのは㊸の海岸域である。

すでに紙数も尽きているので、〈老〉〈青〉それぞれに認められる動態については、別の機会に見ていくこととする。

[注]

- 1) 『福岡市言語地図』岡野信子編、梅光女学院大学方言研究会発行、平成3年。調査と作図を行なったのは、当時梅光女学院大学日本文学科4年生であった次の12名である。岡野信子はその指導にあたった。  
内田路、内山智美、江口直子、蒲原真里、本本真理子、熊谷徳子、坂野直美、原田いずみ、藤原美和、深水真由美、松原智子、松藤礼子
- 2) 『表現法の全国的調査研究—準備調査の結果による分布の概観』(国立国語研究所、1979年3月)
- 3) 『方言文法資料図集(1)』(国立国語研究所、1981年1月)
- 4) 『方言文法全国地図1』(国立国語研究所、平成元年3月31日)
- 5) 『瀬戸内海言語図巻上巻』(藤原与一、東京大学出版会、1974年3月30日)
- 6) 『日本言語地図1』(国立国語研究所、大蔵省印刷局、昭和42年4月)
- 7) 『リ・リー語尾命令形の考察』(岡野信子、『日本文学研究第二七号』、梅光女学院大学日本文学会、平成3年11月1日)